

終末論に関する諸問題 CLXXII

質問と返信(172)

返信文: ロバート・D・ルギンビル博士著

あなたのメール

<https://ichthys.com/e-mails.htm>

からの翻訳



あなたのメール

<https://ichthys.com/e-mails.htm>

終末論に関する諸問題 CLXXII

返信文は、ロバート・D・ルギンビル博士著

[2026 年 9 月 5 日掲載]

質問 #1:

こんにちは、ボブ。

以前の PTL の同僚の方のことを聞いて、本当に心が痛みます。彼女は今、とてもつらい時を過ごしているのですね。彼女のために祈り続けます。

終末論についての取り組みを楽しみにしています。いずれにしても、これから興味深い時代が待っていますね。このプロジェクトの大部分を終えることができ、ほっとしています。これからはもっと時間を学びと備えに使いたいと思っています。

ボブ、あなたのために祈っています。あなたのお祈りにも本当に感謝しています。
イエスにあって、

返信 #1:

以前の同僚のために祈ってくださってありがとうございます。また、終末論について励ましてくださったことにも感謝します。こうしたやり取りの多くは、どちらに転ぶにせよ、長くてもあと数か月もすれば、もはや議論する意味がなくなるでしょう。それまでは、あなたの思いはまさに私と同じです。ほかにどんな気を散らすものがあっても、備え続けることです。

私のためにも祈ってくださってありがとうございます、友よ。私も毎日、あなたとご家族のことを祈っています。

イエスにあって、
ボブ・L

質問 #2:

これには声を出して笑ってしまいました——「もし七年間の猶予が与えられることになったら、そこまで生き延びるつもりなら、間違いなくもっと自分の体を大切に始めな

ければなりませんね！」私も自分について同じことを考えています(笑)。

私たちは引き続きあなたのために祈っています——そして、私たちに忠実に教え続けてくださっていることを、毎日主に感謝しています。本当に、言葉では言い表せないほど感謝しています。

返信 #2:

まさに(笑)ですね！ 私が「重なり」について間違っていないほうがよいと思う理由の一つがそれです。艱難期はそれだけでも十分に厳しいものになりそうなのに、その前に重力と時間にさらに七年間も好き放題されてはたまりませんからね。

そして、励ましという「元気の出る一発」をありがとうございます、友よ！ 注射にも、ありがたいものとそうでないものがありますからね。来週はシングリックスの二回目の接種です。

あなたとご家族がお元気であることを願っています。友よ、皆さんのことを毎日祈っています。

イエスにあって、
ボブ・L

質問 #3:

このリンクにある、「第三神殿は建てられない」などの主張についてコメントしていただけますか？

<https://www.biblebelievingchristian.org/post/the-myth-of-a-third-temple-why-it-s-not-biblical>

返信 #3:

インターネット上では、文字どおりどんなものでも見つけることができます。終わりがますます近づくにつれて、偽教師や偽りの教えの数は指数関数的に増えているように思われます。実際、今日では、相手にしているのが人間なのかどうかさえ、必ずしも見分けられないことがあります！

[[こちらが私の現在の経歴書／履歴書です。](#)]

この「組織」は、そのメンバーも記事の執筆者も一切明らかにしていないことに気づ

きました。完全に匿名です。上の経歴書には私の資格が記されています。もちろん、それらが「私が自分の話していることを分かっている」ことを保証するわけではありません。しかし、原語から聖書を釈義し解釈する仕事をきちんと行えるようになるために、それらの資格を得るのに必要な相当の時間と努力を費やしたことは示しています。インターネット・サイトなら、だれでも一晩で立ち上げることができ、資格も経験も必要ありません。

また、「実を見れば分かる」ということもあります。イエスは、すべての木をその実によって判断するようと言われました[[リンク参照](#)く/あるいは A5 版印刷本「来たる艱難期第2部 A: 七つの教会」の 47 頁へ]。そして Ichthys には、「味わって判断する」ためのものが豊富にあります。このサイトは、もう三十年近くにわたって運営され、活動を続けています。一方、このウェブサイト／組織がいつ、どこから出てきたのかは、だれにも分かりません。

最後に、私は自分が何者であるか、またどのようにしてこの奉仕に携わるようになったのかを、一度も秘密にしたことはありません[[リンク、およびそこからたどれるリンク参照](#)]。それに対して、この組織とその背景については、全くの謎です。分かっている範囲では、彼らはモルモン教徒であってもおかしくありません。

ですから、この非常に問題の多い記事を反駁するために、込み入った細部にまで立ち入るつもりはありません。英語を読める人ならだれにでも、彼らの偽りを明白に反駁している二つの箇所だけを挙げておきます。

「それゆえ、預言者ダニエルによって語られた『荒らす憎むべきもの』が聖なる場所に立っているのを見たなら——読者は悟れ——その時、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は、家から何かを持ち出そうとして下りてはならない。畑にいる者は、上着を取りに戻ってはならない。その日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は、なんと悲惨なことであろう。あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。その時には、**世界の初めから今に至るまで一度もなく、また二度とないほどの大きな苦難**[字義的には「艱難」]があるからである。もしその日々が短くされなければ、だれ一人として生き残ることはできない。しかし、選ばれた者たちのために、その日々は短くされる。」([マタイ 24 章 15-22 節](#) /NIV 訳)

私たちの主がここで艱難期について語っておられることを疑う人がいるのでしょうか？もし疑うのであれば、そのまま読み続けるべきです。

「その日々の**苦難の直後**〔字義的には「**艱難期**」〕、『太陽は暗くなり、月はその光を放たず、星は空から落ち、天の万象は揺り動かされる。』その時、人の子のしるしが天に現れる。そして地上のすべての民は嘆き、人の子が力と大いなる栄光をもって天の雲に乗って来るのを見る。」([マタイ 24 章 29-30 節](#) /NIV 訳)

再臨は艱難期の後に続きます。そしてマタイ 24 章が扱っているのは艱難期です。なぜなら、艱難期は私たちの主の再臨に先立つものであり、その再臨こそ、弟子たちが主に尋ねたことだからです。

イエスがオリーブ山に座っておられると、弟子たちがひそかにみもとに来て言った。「お話しください。それはいつ起こるのですか。また、**あなたが来られることと、この時代の終わりには、どんなしるしがありますか。**」([マタイ 24 章 3 節](#) /NIV 訳)

同じように問題なのは、この記事が第二テサロニケの箇所を、まともな説明もせずに退けていることです(彼らは「すでに上で扱った」と言っていますが、実際には扱っていません)。

私たちの主イエス・キリストの**来臨**と、私たちが主のみもとに集められることについて、兄弟姉妹たちよ、あなたがたにお願いします。預言によってであれ、口伝えであれ、私たちから出たとされる手紙によってであれ、主の日がすでに来たとする教えによって、すぐに動揺したり、慌てたりしないでください。どんなことがあっても、だれにも欺かれてはなりません。その日は、まず**背教**が起こり、**不法の人**、すなわち滅びに定められた者が現れなければ、来ることはありません。彼は、神と呼ばれるもの、また礼拝されるものすべてに逆らい、その上に自分を高く上げ、ついには**神の神殿に自ら座し**、自分こそ神であると宣言します。私があるあなたがたと一緒にいた時、いつもこれらのことを話していたのを覚えていないのですか。([第二テサロニケ 2 章 1-5 節](#) /NIV 訳)

「来臨」(parousia[[リンク](#)参照<ペテロシリーズ#27 の 11 頁-「パルーシア」という言葉について>])とは再臨のことです。「背教」とは大背教のことです[[リンク](#)参照<リンク先ファイル/あるいは A5 版印刷本「来たる艱難期第3部 A の 19 頁-を参照下さい>]。「不法の人」とは反キリストです[[リンク](#)参照<あるいは A5 版印刷本「来たる艱難期第 3 部 B:反キリストとその王国」を参照下さい]。そして、神の神殿とは神の神殿です。これは比喻ではありません。また、すでに歴史上成就したものでもありません(艱難

期がまだ起こっていないことは明らかです)。これは、艱難期の間に急速に再建される第三神殿のことです……この問題を扱っている聖書のほかのすべての箇所も、そのことを裏づけています。この記事にある「議論」のどれかを受け入れるためには、すべての預言がすでに成就したと信じるほかありません。しかし、もしそれが本当なら、私たちの主はどこにおられるのでしょうか？ 復活はどうなったのでしょうか？

ところで、キリストが死人の中からよみがえられたと宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者は、どうして死人の復活などないと言うのか。もし死人の復活がないのなら、キリストもよみがえられなかったことになる。そして、もしキリストがよみがえられなかったのなら、私たちの宣教は無駄であり、あなたがたの信仰もまた無駄である。(第一コリント 15 章 12-14 節 /NIV 訳)

上にある異端は、そのような偽りの教えを信じたことから論理的に生じた結果でした。私たちはイエス・キリストと、その復活と、その再臨を信じています。そして、それが起こるのは**艱難期の後**であり、艱難期に関係するすべての預言——その中には、反キリストが第三神殿に座することも含まれます——が成就した後であることを知っています。それまでは、私たちは聖書の忠告に従います。

私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが主のみもとに集められることについて、兄弟姉妹たちよ、あなたがたにお願いします。預言によってであれ、口伝えであれ、私たちから出たとされる手紙によってであれ、主の日がすでに来たとする教えによって、すぐに動揺したり、慌てたりしないでください。**どんなことがあっても、だれにも欺かれてはなりません。**その日は、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びに定められた者が現れなければ、来ることはありません。(第二テサロニケ 2 章 1-3 節 /NIV 訳)

「どんなことがあっても、だれにも欺かれてはなりません」。一まことにすばらしい忠告です。

イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #4:

こんにちは、ボブ。
親切で励みになる言葉を本当にありがとうございます。でも、栄光は主に帰すべきも

のですよね？ この火のような試練を通して、自分がどれほど大きな過ちをたくさん犯し、自分自身の理解に頼ってきたかも分かるようになりました。それでも、主がそこを通り抜ける道を示してくださっていること、そして今では、すべてを主の確かな御手に委ね、主が私に望んでおられることを行うために信仰によって進んでいくという、より深い信仰を持てるようになったことに、本当に安堵しています。

昨日、あなたがおっしゃっていたように一息ついたのですが、残念ながら、自分を哀れんで一日を無駄にし、その後は「ドゥームスクローリング」をしてしまいました。この世界が本当にもうすぐ終わるという外からの証拠が欲しかったのです。というのも、私は焦って、これらすべてが早く終わってほしいと思っていたからです。

〔省略〕

とにかく……また戦いに戻ります。

今日あなたのサイトに掲載されたメールを読んでいて、ある返信(質問 4)で「主権者救済論(Lordship salvation)」に触れておられましたが、私は個人的にはこれまでほとんど接したことがなく、よく理解していません。つまり、信仰において前進しておらず、何事についても主に本当に頼っているわけではなく、試されることもほとんどない弱い信者／幼いクリスチャンもいるけれど、それでも彼らは救われているということですね。たとえば、彼らは罪と戦うことだけに集中して前進していないかみしれず、弱い信仰を支えるために律法主義へと傾く誘惑を受けるかもしれません。このような信者は、強い信仰も実も欠いているとはいえ、それでも信者であり、救われています。しかし、艱難期に備えて「熱く」ならなければ、背教に非常に近いところにいることになるので、霊的に安全な状態にはありません。このような信者は艱難期に、特に律法主義、自己義認、背教といった偽りの教えに対して無防備になるでしょう。なぜなら、その人が集中しているのは、

「さわるな、味わうな、触れるな」(コロサイ 2 章 21 節 NKJV)

ということだけだからではないでしょうか？

主は、艱難期に生ぬるい者がどうなるかについて警告しておられます。

「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、あなたは生ぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」(黙示録 3 章 15 節 NKJV)

終わりがこれほど近づいていることを考えれば、上の聖句は生ぬるい信者を恐れさせるものであるべきですよね?!

主ご自身のこの御言葉から考えると、クリスチャンが艱難期の間ずっと幼い／生ぬる

い信者のままでいることは不可能なのではないでしょうか？ 彼らは「熱く」なって成熟を速めるか（「成長する」には最悪の時期に）、それとも「冷たく」なって信仰から離れ、背教して救いを失うかのどちらかにならざるを得ないでしょう。

この反対側の極端にいるのが、罪と戦うことにまったく関心のない弱い信者です。そのような人が、罪によって弱められた状態にとどまるなら、霊的成長（単に防御するだけでなく、前進すること／攻めること）は起こりません。このような信者は、少なくとも罪に対する防御を強めようとしている幼い信者よりも、さらに悪い立場に置かれるでしょう。なぜなら、艱難期は罪人にとって非常に誘惑の多い時となり、弱い信者が、いわば木がまだ「青い」時でさえ頻繁に誘惑に屈しているなら、木が「枯れた」時には、それに打ち勝つのに本当に苦勞することになるからです。このような信者は、信仰を保とうとしながら罪を受け入れる（死に至る罪）か、あるいは罪を手放さずに信仰／救いを失う（背教）かという危険にさらされるでしょう。

主権者救済論の話に戻りますが、私はこの偽りの教えにほとんど接したことがなく、まったく理解できていません……彼らは、幼い信者でも救われた直後から御霊の実を生み出していると信じているのでしょうか？

自分自身の経験から言えば、信仰の歩みを本当に整えていくまでには時間がかかりましたし、聖霊に耳を傾け、信仰だけによって歩み、生きようになるまでにも長い時間がかかりました。初めの数日、数週間、数か月の間、私は律法主義にも自己義認にも非常に陥りやすく、クリスチャンらしい言葉や用語をたくさん口にし、クリスマスやイースターを祝うべきかどうか、豚肉を食べるべきかどうかといったことに夢中になり、「クリスチャンの YouTube 動画」をあれこれつまみ食いしているだけで、まったく前進していませんでした。

私が本気で聖書を学び始めたのは、あなたのミニストリーを見つけた後のことでした。最初はあなたにメールを送っているだけでしたが、それから週末に掲載される記事を読むようになり、やがて少しずつ、聖書そのものを真剣に学ぶのと並行して、あなたの教材を学ぶようになりました。今では聖書全体を最初から最後まで通読しました。残念ながら、そうするまでに本来かかるべき以上の時間がかかってしまいましたが、それでもやり遂げました。そしてもちろん今、もう一度聖書全体を読み直しています（ただし、福音書を最も多く読み返しているのをはじめ、いくつかの書簡や旧約聖書の一部など、何度も繰り返し読んできた箇所もあります）。

なぜか、あなたのサイトで最初から最後まできちんと学んだ最初の本格的な聖書研

究は、「サタンの反逆」と「来たる艱難期」でした。なぜなのか自分でも分かりませんが、「ペテロの手紙」の学びを始める前に、この二つを学びました。残念ながら、私は自分がどれほど簡単に気をそらされてしまうかを知っています。本格的な学びに力を入れようとするたびに、何かが人生に起こって私をそこから引き離し、特に状況が非常に厳しくなると、残念ながら学びを中断してしまいます。しかし、本当は困難な時ほど、なおいっそう学びに打ち込むために戦うべきなのだと分かっています。

それで、もう一度主権者救済論に戻りますが、彼らは、信者は成長することなしに、信じたその時から成熟していると考えているのでしょうか？ 私には本当に理解するのが難しいです。これは主にカルヴァン主義者の教えで、過去にはマッカーサー、スプロール、パイパーのような人々がこれを推し進めていたように見えます（マッカーサーとスプロールは現在では故人であり、パイパーはカルヴァン主義者というよりカリスマ派に近いですが）。

Wikipedia で主権者救済論について調べると……

1) 第一の見解……（この教えを支持する立場）

アーサー・W・ピンクは次のように要約しています。

「キリストを主として拒みながら、救い主として受け入れることのできる人は一人もいません。したがって、キリストの王笏の前にひざまずかず、自分の心と生活の王座にキリストを迎えていないにもかかわらず、キリストを救い主として信頼していると思っている者は、自分自身を欺いているのです。」

※現在、「キリストは王である(Christ is King)」と言うことへの一種の熱狂や社会的な運動がありますが、これは主権者救済論と関係しているのでしょうか？

2) 第二の見解（この教えに反対する立場）

第二の見解は主権者救済論に反対する人々のもので、イエス・キリストを救い主として受け入れることはできるが、キリストを主として受け入れる必要はない、というものです。

それでは、先ほど私が書いたことは、この問題と関係しているのでしょうか？ 私が言いたいのは、信者が主に従順になるには時間がかかるので、救われてから従順になり、実際に主が望んでおられることを行うようになるまでには、大きな隔たりがある場合もあるということです。私自身の経験からしても、また周囲の信者を見ても（さらには聖書の中でも）、救われるのに必要なからし種ほどの信仰から、従順な信者へと成長するには、かなりの時間がかかることが多く、それは一夜にして起こるものではありません。人は信じた時に直ちに救われますが、従順になるには長い時間がかかります。そして

この二つの間には必ず隔たりがあるのですから、従順が救いそのものの一部であるはずはありません。

この明らかに偽りである教えは、弱い信者や幼い信者などというものは存在せず、新しく生まれた信者は直ちに主に従順になり、その従順が救いの一部である、と言っているようにしか私には思えません。これはおかしい話です。全く信仰のなかった状態から信仰を持つようになり、そこからすぐさま正しい方向に燃えるように熱くなった信者など、私は一人も知りません。この救いについての考え方は、信仰のみ、恵みのみ、そして信仰によって与えられる無償の賜物という真理を損なうだけでなく、幼い信者に律法主義的な重圧をかけるものでもあるように思えます。それは、カリスマ派の人々が、「異言を語れないなら救われていない」とか、「油注ぎ」を受けていない、あるいは「特別な／主要な／本物の御霊の注ぎ」を受けていないなら、本当は救われていない、と言うのとよく似ています！ カリスマ派をいつも喜んで嘲笑しているカルヴァン主義者たちが、それと同じくらい有害で誤ったものを取り入れているというのは皮肉なことです。つまり、両者とも溝に落ちていて、狭い道の上にはいないということが分からないのでしょうか！ 自分たちの溝のほうが、もう一方の陣営の溝より大きいとか、まだとでも思っているのでしょうか？

この問題について、あなたから導きをいただければ大いに助かります。世の中には非常に多くの偽りの教えがあり、そのすべてについて把握し続けることは、とてつもなく大変な仕事のように感じる場合があります。しかし、主権者救済論は有害で広く行き渡っている偽りの教えのようですから、奉仕のためにも、このことについて知っておくのはよいことだと思います。

友よ、これまでしてくださったすべてのことに、改めて感謝します！

イエスにあるあなたの友より

追伸：今回は掲載してくださって構いません。自分の信仰の歩みや理解が今どのような状態にあるのかについて、かなり率直に書きましたので。

返信 #4:

この世界は終わります……いずれは。しかし、私たちに与えられているのは一日一日ですから、実質的な観点からすれば、それが明日であろうと千年後であろうと関係ありません。

「[私は]もう一度戦いに戻ることによって、従順であろうと決心しています」について。いいですね！ あなた自身が自分で決断しなければなりませんし、私にはあなたが書いてくださることから判断することしかできませんが、私には、しっかり踏みとどまることがあなたにとって最善の戦略であり、前進するための最善の道であるように思えます。私があなただけを知って以来ずっと、あなたは何度も「引き戻され」てきました。悪しき者があなたの善意につけ込んできたのです。今あなたは、物事を良い「最終的な状態」にまで持ってきました。ですから、_____する前にはよく考えるようお勧めします…それは_____につながり……さらに、物事が元の状態にすっかり戻ってしまうことにもなりかねないからです。

(13) そのことを心に留め、神の完全な武具を身につけなさい。それは、悪があなただけを取り囲む日に攻撃に抵抗し、自分の立場を守り抜くことができるためです——自分の責任で行うべきことをすべて行った上で(すなわち、それまでの霊的成長と、現在における霊的な適用を行った上で)。(14) ですから、自分の立場を守り抜きなさい。真理を帯として腰に締め、義の胸当てを身につけ、(15) 平和の福音[を伝える]備え(すなわち、キリストへの信仰によって神と和解すること)を足にはきなさい。(16) また、どんな時にも信仰の盾を取りなさい。それによって、悪しき者の放つ火の矢をすべて消すことができます。(17) そして[この霊的戦いにおいて]救いのかぶとをかぶり、御霊の剣——すなわち真理のみことば——を身につけなさい。(エペソ 6 章 13-17 節)

「主権者救済論(Lordship salvation)」についてですが、もしそれが分かりにくく思えるなら、当然です。それは異端であり、聖書に何の根拠もない偽りの教えだからです。そのため、それはその時々、どんな(偽教師)でも自分の望むようなものにすることができます。曖昧で、はっきりと定義するのが難しい「教え」は、悪魔の常套手段です。その曖昧さそのものが、このようなでたらめな教えが根本において偽りに基づいているという事実を覆い隠し、またその不明確さが聞く人の心に不安を生じさせます……そして、その結果、その人たちは(聖書や主ではなく)その教師に依存するようになります。そうしなければ、自分は「救われていない」かもしれない、あるいはそれに類する状態にあるかもしれないと思わされるからです。これは、あなたが始めつつある奉仕の中ですでによくご存じの、典型的なカルトのやり方です。皮肉なことに、この場合、聞く人はそれが「イエスの主権」と何らかの関係があるものと理解しますが、実際には、主ご自身に対する真の忠誠を引き離し、その忠誠を代わりに教師やその集団へと向けさせる結果になります。このことについて、私は BB 4B で次のように書いています。

偽り:「救われるためには、キリストを『主』として認めることが必要である」。真理:イ

エス・キリストは主であり、キリストが神であるという真理は福音の重要な一部です。そして、聖霊によってそれを理解することを許されたすべての人は、救いに至る信仰を働かせる際、その真理を受け入れます。しかし、救われるために、この事実を別個に、公に、目に見える形で宣言する必要はありません。そして、このことや、福音に付け加えられたほかの偽りの条件(この短い一覧に含まれているものであれ、そうでないものであれ)を自分の確信の根拠として頼る程度に応じて、その人の救いは危ういものとなります。なぜなら、行いによって救われる者は一人もいないからです([ヨハネ 6 章 29 節](#); [エペソ 2 章 8-9 節](#))。

あなたが気づかれたように、この福音についての混乱は、ほかの領域にまで広げられることがあります。これらの偽りの教えに実際に共通しているのは、それらが偽りであるということのほかには、その名称と、具体的に何を意味するのかをはっきり突き止めるのが非常に難しいという事実だけです。というのも、偽りの教えがいつもそうであるように、その内容が絶えず変わるからです。それらは聖書の中にないので、その教え自体を聖書に照らして検証することはできません(聖書から、それらが聖書的ではないことを見抜かなければなりません)。この特定の異端の起源は、[ローマ 10 章 9-10 節](#)の誤った解釈にあります。この箇所は救いに何か条件を**付け加えているのではなく**、単に救いを別の仕方では表現しているだけです(パウロはしばしばそのようにしています。このことについてはこちらの[リンク](#)を参照してください)。

艱難期への備えという点では、幼い信者が背教に陥ったり、獣の宗教を受け入れたりに対して非常に無防備になるというあなたの考えは正しいです。しかし私は、多くの人々が出来事に促されて、ついに霊的成長に真剣に取り組むようになることを予想しており、心からそう願っています。何といっても、キリストの再臨の時には、多くの人々がよみがえらされるのですから(たとえば、[第一テサロニケ 4 章 13-17 節](#))。ですから、もし主がその時まで私たちをここに残して、その働きをさせてくださるなら、私たちにはなすべき仕事がたくさんあるでしょう。

罪について言えば、これは、新しい信者が主として集中すべきものは罪ではない、と説明する必要がある領域の一つです。もちろん、私たちは罪を犯すべきではありません。もちろん、ある種の罪は非常に破壊的で、それにふけるならクリスチャンの信仰を完全に押し流してしまうことがあります。もちろん、私たちは「それなしには、だれも主を見ることができない」罪からの聖別を追い求めるべきです([ヘブル 12 章 14 節](#))。しかし、最も重要なのは霊的成長です。人は成長すればするほど、罪とは何か、それにどう対処すべきかをよりよく理解するようになり、また、それに対処するための備えもよりよく整えられていきます。成長と聖別というこの二つの取り組みは、どちらも必要です。

ボクシングの試合では、攻撃をかわしたり防いだりするだけでなく、こちらからもパンチを打たなければなりません。打つことだけを考えている人は、自分もひどく打たれることになります。しかし、かわしたり防いだりすることだけを考えている人は、相手にまったくダメージを与えないまま、さらにひどく打ちのめされる可能性があります。このことについて間違った考えを持つ信者は、しばしば過去の罪についての罪悪感という罠に陥り、「霊的に前進すること」ではなく、「罪を犯さないこと」にばかり心を奪われるようになります。

このミニストリーは、罪の問題を無視しているわけでは決してありません[リンク]。しかし、私はいつも霊的成長を強調しています。なぜなら、本当に主に献身し、成長しようと思っている人なら、たとえつまずいても、再び立ち上がり、パンチを打ち続けながら、攻撃をかわし、防ぐ方法も学んでいくからです。しかし、成長することを決して決意しない信者は、いつまでたっても前進せず、結局は、そうでなかった場合よりも罪に対して無防備になります。これまでこのミニストリーに連絡してきた、苦しみ悩む非常に多くの人々からのメールの中で、あなたもきっとそのことを目にしてきたでしょう。私たちの神は赦しの神です。なぜなら、イエスが私たちのすべての罪のために死んでくださったからです。その犠牲を尊ぶ最善の方法は、私たちの主が望んでおられることを行うことです。

三度目にイエスは彼に言われた。「ヨハネの子シモンよ、あなたはわたしを愛するか。」イエスが三度目に「わたしを愛するか」と尋ねられたので、ペテロは心を痛めた。そして言った。「主よ、あなたはすべてをご存じです。私があなたを愛していることを、あなたはご存じです。」イエスは言われた。「わたしの羊を養いなさい。」([ヨハネ 21 章 17 節](#) /NIV 訳)

友よ、あなたのことを毎日祈っています。
イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #5:

まず最初に、私たちはとても元気になっています。あなたもお元気であることを願っています。

数分前、なぜ神はアダムとエバを造ることを思いとどまられなかったのだろう、と考えて

いました。しかし、それからもう少し考えてみました。私の頭の中で考えたことは次のとおりです。第一に、神は全知であり、すべてをご存じです。第二に、アダムとエバを造られた目的は、それ以前の地が滅ぼされた後、神が再創造された地に人を満たすためでした。第三に、天使サタンは神を捨て、ほかの多くの天使たちを説得して自分について来させました。彼らがどうなったかは分かっています。すなわち、底知れぬ所です。第四に、神はこれらすべてのことが起こることをご存じでしたが、それによって動揺されることなく、創造を行われました。第六に、神は世界を再創造し、そこにアダムとエバを置かれましたが、彼らは失敗しました。しかし、その時も神は動揺されませんでした。第七に、アダムとエバは神から離れて墮落しましたが、神はそうなることをご存じでしたので、それに驚かれることはありませんでした。人間である私の言い方をすれば、神は失望された、と言えるかもしれません。しかし、その時も神が不意を突かれることはありませんでした。第八に、主はすでに計画を持っておられ、その計画によってサタンと、神から離れた天使たちを取り除かれることになっていました。第九に、私たちはこの罪に満ちた地の終わりにほぼ到達しており、新しい天と新しい地へと向かっています。私がこう言うのは、キリストの花嫁である私たちにとって、千年王国で過ごす期間は短いものとなるからです。

私が書いたことについてぜひコメントをいただきたいですし、私の書いたことが正しいかどうか教えていただきたいです。

また、何か適切だと思われることがあれば、何でも付け加えてください。そうしていただければ、とてもうれしいです。

あなたは私の兄弟であり、すばらしい兄弟です。そして、永遠に私の友です。

いつもあなたに祝福がありますように。

あなたの友より

返信 #5:

それはすばらしい知らせです、友よ！ 私は毎日、お二人の健康と、そのほかすべてのことについて祈っています。

あなたの分析に同意します。神が驚かれることは決してありません。これまでに起こったことも、これから起こることも、宇宙全体の素粒子レベルに至るまで、すべてが神の完全な計画の中に含まれていました。そして、神が創造を始められるよりも前にそれを定めておられなければ、何一つ起こることはありませんでした。

主よ、あなたのみわざはいかに大いなることでしょう。あなたの御思いはいか

に深いことでしょう。(詩篇 92 篇 5 節 /NIV 訳)

いいえ、人類は後から思いついて付け加えられたものではありません。私たちの創造(そして墮落)も、私たちの救い主が私たちを救ってくださることも、初めからずっと「その計画」の一部でした。あなたが正しく推察されているように、このことは悪魔の反逆との関係を抜きにして理解することはできません。言葉では言い表せないほどすばらしく、知恵に満ちた神の計画がもたらす結果は、神のかたちに造られた被造物が、自らの自由意志によって神と共にいることを選び、そこに住む完全で永遠の世界です。それは、この完全な計画によってのみ可能でした——そして完全な計画はただ一つしかなく、その中のたった一つでも変更されれば、もはや同じ計画ではなくなってしまふのです。

ああ、神の知恵と知識との富は、なんと深いことであろう。そのさばきはなんと測り知れず、その道はなんと究めがたいことであろう。(ローマ 11 章 33 節 /NIV 訳)

「サタンの反逆」シリーズは、これらの疑問に答え、このことすべてを説明するためのものです(同じ内容を要約した BB 2B「終末論」も参照してください。リンク参照)。以下は、以前にも掲載した、この計画を概略の形でまとめたものです。これはコロサイ 1 章でも大きく取り上げる予定です(夏の終わりまでには完成させて掲載したいと思っています。それまでは序論へのリンクをご覧ください[第 1 章は現在リンク先に掲載されています])。そこから一部を引用します。

概略の形で言えば、悪魔を徹底的に論駁して打ち負かし、神の世界を完全な状態へと戻すためには、神がその悪のゆえに世界をさばき、その後それを回復し、神のかたちに造られた新しい種族を創造して、サタンとその追従者たちにとって代わらせる必要がありました。神はこれを三つの段階で行われ、今も行っておられ、これからも行われます(これまでに学んできたとおりです)。

1. 第一段階:構成(Constitution): 永遠の勝利のための土台を据える段階(「多く」の段階)。
 - a. さばき I:創世記の間隙
 - b. 回復 I:七日間の再創造
 - c. 置き換え I:最初のアダムと最後のアダム
2. 第二段階:完成(Completion)

- a. さばき II: 艱難期
- b. 回復 II: 千年王国
- c. 置き換え II: 王なるキリストとその教会

3. 第三段階: 成就 (Consummation)

- a. さばき III: 最後のさばき
- b. 回復 III: 新しい天と新しい地
- c. 置き換え III: 御父の到来

この崇高で、人知を超えたご計画は、神が創世記 1 章 1 節の最初の宇宙を造られる前から——また、いかなる天使を造られる前から——常に神の御計画でした。サタンの反逆の後、神と聖なる天使たちは第三の天に退かれ、この世界を悪魔とその追従者たちに任されました。それから、どれほどの期間であったかは分かりませんが、おそらく非常に長い期間が過ぎました。それは少なくとも、悪魔に支配された世界がいかに機能しないものであるかを、天使たちに疑いの余地なく示すのに十分な期間でした。その後、神はサタンの領域にさばきを下し、それを暗闇に沈め、上の水で覆われました。悪魔の追従者たちがどれほど長く暗闇の中に置かれ、自分たちの運命について思い巡らし、神に何ができ、何をなさるかについてサタンが語っていた確約が全くの偽りにすぎなかったことに衝撃を受け、驚いていたのかについては、私たちには知らされていません。しかし、悪魔とその天使たちにとって代わる神の被造物を創造するための環境を整えるのに必要であった、七日間による世界の回復が、すべての天使たちから喜びをもって迎えられたことは分かっています。

このことについて何かあれば、どうぞ遠慮なくまた書いてください。友よ、いつものように温かい言葉をありがとうございます。

イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #6:

こんにちは、ボブ。

また私が見当違いな方向へ行っているとお感じにならないかぎり、返信していただく必要はありません。

どうやらカナダでは、承認されていない聖書の一部が禁止されたようです。これは反キリストと、そのエキュメニカルな計画に符合します。あらゆるしるしが、ますますはっきりと現れてきているように見えます。私が思っていた以上に、9月が近づいているように思えます。あなたのおっしゃったとおり、すべてが私の想像していたよりも速く進んでいます。

イエスにあって、

返信 #6:

カナダには、かなり憂慮すべき「ヘイトスピーチ」に関する法律がいくつかあることは知っています。それを考えると、私たちは皆、合衆国憲法修正第一条のありがたさを認識すべきでしょう。しかし、聖書の一部が公式に禁止されたということは知りませんでした。

9月について。私は10月半ばに注目しています。その月を、黙示録8章5節の出来事が起こることなく過ぎるなら、おそらく私たちはさらに七年間は「大丈夫」ということになるでしょう。それはおそらく、私の「重なり」についての解釈が間違っていることを意味するでしょう。「大丈夫」と言っても、私個人としては、艱難期にすぐ直面しなくてもよいという安堵はあるものの、私たちの主の再臨を待つ期間にさらに七年が加わることには失望するでしょう。

これまで繰り返し述べてきたように、この世界、この国、この文化、そしてこの技術的・社会的な「今」という時点における私たちの現在の状況を見ると、一方では、神のさばきなしに現在の傾向がさらにそれほど長く続くことはあり得ないように思えます。しかし他方では、現在の状況が、預言に描かれている艱難期の政治的・国際的状況へと、これほど急速に変化し得るとはなかなか考えにくいようにも思えます。しかしもちろん、どちらもあり得ることです。細かな点について言えば、短期的にも長期的にも、すべてがどのように展開していくのかをご存じなのは神だけです。しかし、私たちは、それらの出来事の全体的な流れが聖書の中に示されているという、本当に大きな祝福を受けています。この夏から秋にかけて「来る艱難期」をもう一度読み返し、霊的に備えるためにできることをしていくつもりです。

友よ、あなたのことを祈り続けています。

イエスにあって、

ボブ・L.

質問 #7:

こんにちは、ボブ。

どうやらカナダの法案 C-9 のことだったようで、聖書をヘイトスピーチとして用いることだけを犯罪とするものだったようです。私には、それでどれほど違いがあるのかよく分かりません。コーランが同じように扱われたとは思いません。それでもやはり、これは私たちが反キリストの体制により近づける動きだと思います。

<https://www.virtueonline.org/post/canada-s-parliament-officially-passes-bible-ban-bill-c-9>

なぜ 10 月を区切りとしておられるのか興味があります。イスラエルの暦が正確には分からないからでしょうか？ もしこの秋にそれが来ないのであれば、それが来る時まで自分が生きているとは、とても思えません。

お祈りをありがとうございます。私も引き続きあなたのために祈っています。

私たちの主にあつて、

返信 #7:

今日の世界には、そのような「罨」がたくさんあります。ソフトウェアか何かをインストールする時、先へ進むことを許可される前に、チェックボックスをクリックしなければならない、あの途方もなく長い法律用語だらけの文書を思い出します。いいえ、実際、私はあの解読不能な 32 ページを読んではいません。はい、私はこのソフトウェアか何かを使う必要があります。しかし、いざ問題になった時には、私はひどい目に遭うのでしょうか。実に不公平です。悪魔の世界へようこそ。

なぜ 10 月なのか？ 神の定められた実際の過越し(実際に祝われていた時期とは別に)が 4 月だったとすれば、10 月はその六か月後だからです。ですから、今年、それに対応する過越しが 3 月 18 日の新月から二週間後であり、その日と祭りの期間が 4 月 1 日から 9 日までだったとすれば、最も遅い場合の限界の日付として、おそらく 10 月半ばを見ることになるでしょう([黙示録 8 章 1 節](#)の「半時間の静けさ」参照。私はこれを六か月と解釈しています。[リンク](#)＜リンク先ファイル「来たる艱難期第 3 部 A:艱難期の始まり」の 13 頁-「5.雷のような声、稲妻、地震」を参照下さい）。さまざまな理由から正確な日を確定することはできませんが、[黙示録 8 章 5 節](#)の出来事が起こらない

まま10月が過ぎ去るなら、私は「重なり」の解釈について、自分の間違いを認めなければなりません。なぜなら、その場合には、おそらくさらに七年先ということになるからです。私個人としては、「早ければ早いほどよい」と思っていますが、もちろん、それを決めるのは私たちではありません。

「それが来る時まで自分が生きているとは思えない」について。前にも述べたように、それもまた、私たちのだれにも分からないことです。私たちに与えられるのは、一日だけです。それは、私たちに残されている日数が、願っていた／想像していたよりもはるかに少ない場合でも……あるいは、はるかに多い場合でも同じです。

友よ、あなたのお祈りにも感謝します！

イエスにあって、

ボブ・L.

質問 #8:

こんにちは、ボブ。

サタンがほかの銀河で生命を造り出した可能性はあると思われますか？ 彼が創世記の間隙を生き延び、その後ネフィリムを生み出したことは明らかですから、彼とその手下たちにはそれができるといことになります。あなたのお考えでは、彼はほかの場所でも、この地上で受けているのと同じ制約を受けているのでしょうか、それとも受けていないのでしょうか？ そうでないとするば、私はやはり、「宇宙人」に関する情報の「公開」は大がかりな欺瞞であり、何らかの未知の目的のためのプロパガンダだと思っています。おそらく反キリストのエキュメニズムと関係しているのでしょうか？ どう思われますか？

こんな質問にもお付き合いくださってありがとうございます！ 急ぎません。まず重要なことからお答えください。

私たちの主にあって、

返信 #8:

確かなことは言えませんが、私はその可能性を大いに疑っています。悪魔には生命を創造することはできず、単にそれを操作することしかできないように思われます。ネフィリムも、生きた人間の種によって生まれています。恐竜も、おそらくトカゲや蛇などを操作して造られたのでしょう。サタンの反逆に対する神のさばきによってすべてのものが

完全に滅ぼされる前には([創世記の空白期](#)。リンク参照)、ほかの場所、「宇宙の彼方」に生命が存在していた可能性はあります。しかし、七日間の再創造の間に、そのようなものが復活させられたことを示すものは何もありません。実際、創世記で再び人が住めるように整えられているのは地球だけです。大空のほかの部分、私たちのために光を与えるものとされています(星は「夜の明かり」であるだけでなく、季節を示すものでもあります)。また、神が再び明かりをとともされてから、まだおよそ六千年しか経っていません。人類の創造と私たちの墮落以来、真理を覆し、神の計画を妨げようとする悪魔は、そのために多大な努力を払わなければなりません。そのことが、悪魔自身とその勢力の注意をも占めてきたように思われます。事が起こっているのは「ここ」なのです。ほかの場所に力を注ぐことは、第二次世界大戦のディー・デイ直前に機甲師団を南極へ送り込むようなものでしょう。

友よ、お元気であることを願っています！
あなたのことを祈り続けています。
イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #9:

確認してくださってありがとうございます、ボブ。悪霊以外の宇宙生命体の存在を少しでも示唆するようなことは、聖書のどこにも読んだことがありません。また、彼らが滅ぼされたとか、元いた場所へ送り返されたことを示す箇所も、聖書の中で読んだことがありません。彼らは今も私たちと共にいて、ニュースの見出しをざっと見るかぎり、かなり活発に活動しているのではないかと思います。

こちらはすべて順調です、ありがとうございます。雨の中でも無事に過ごしておられるよう祈っています。そちらはオハイオ川にかなり近いですからね。お祈りをありがとうございます。私も引き続きあなたのために祈っています。

私たちの主にあって、

返信 #9:

世の中には悪霊がたくさんいます。しかし、底知れぬ所にも大勢います。そこには、「基本的なルール」に対する何らかの違反のために隔離された墮落した天使たちがおり、そのうちのかかなりの数は、創世記 6 章のネピリムに関する忌まわしい行為のために幽閉されました([第二ペテロ 2 章 4 節](#); [ユダ 6 節](#)参照)。これらのほとんど、あるいはすべてが艱難期の中に解放されます(黙示録 9 章の[第五のラッパのさばき](#)と[第六のラッ](#)

[パのさばき](#): [リンク参照](#)＜それぞれ、[リンク先ファイル](#)/あるいは A5 版印刷本の 218 頁 – と、231 頁–を参照下さい＞)。しかし、千年王国の間には、彼らの指導者を含め、全員が閉じ込められることになります ([リンク参照](#))。

雨はもう止みました。川の水位は 14 フィートまで上がりましたが、21 フィートに達しないかぎり、心配する必要もなければ、防水ゲートを設置する理由也没有。今度は暑さがやって来ました！ そちらもきっと、かなり暑いでしょうね！

友よ、お祈りをありがとうございます。
イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #10:

こんにちは、ボブ。

私が定期的に教会に通っていた時にも、時々出席していた時にも、聖職者との会話や彼らの書いたものを読む中でも、悪霊や悪霊の影響について触れたり、論じたりするのを一度も聞いたことがありません。ある意味では、それもまったく驚くことではありませんが。

余談ですが、今日読んだところでは、ブラジルで宇宙人の侵略をめぐる騒ぎがあったそうです。そして面白いことに、その宇宙人からのメッセージは完璧なポルトガル語だったようです。英訳がほとんど口語的なほど自然だったので、そう推測しています。

情報とサポートをありがとうございます。
イエスにあって、

返信 #10:

どういたしまして！

まあ、もちろん ET (宇宙人) は英語を話しますよ。そんなことは誰でも知っています。念のために言っておくと、

Duc me ad ducem tuum! (ラテン語で「あなたの指導者のところへ連れて行け！」)。

教会について：驚くことではありませんね。ただ、それも、「教会」では決して耳にすることのない、聖書の主要かつ重要な教えのほとんどすべての一覧に加えておいてください……もともと、耳にするとすれば、たいてい間違っただけの場合です。

イエスにあって、

ボブ・L.

質問 #11:

まったくそのとおりですね！ 前回エホバの証人が訪ねて来た時、私が三位一体を信じているとはっきり言ったら、それ以来来なくなったという話をしましたっけ？ あれ以来、彼らの姿を見ていません。

そちらでは雨が止んだとのことでよかったですが、暑さについては本当にお察しします。そちらの湿度は耐え難いほどでしょうね。こちらは華氏 90 度台半ばくらいまでしか上がっていませんが、直射日光が強烈です。こちらでは当分、雨の見込みはありません。

私たちの主にあって、

返信 #11:

エホバの証人への対応、お見事でした！ 真理に対するあなたの確信にも、彼らはきっとたじろいだことでしょう。

少なくとも私たちにはエアコンがあります。イギリスにいる私の友人たちのほとんどはエアコンを持っていません——しかも来週には、また熱波が彼らのところへ向かっています。そう考えると、自分が今いる場所にいられることをありがたく思います。

こちらでも直射日光は厳しいですが、もっと低緯度の地域ほどではありません。そのことは、何年も前に両親を訪ねてフロリダへ行った時、身をもって知りました。暑さ指数がそれほどひどくない時でさえ、真昼の太陽は、気をつけていないと本当に人をぐったりさせます。

イエスにあって、

ボブ・L.

質問 #12:

こんにちは、ボブ。

私は今、すべてのことを霊的／永遠的／神の観点から見ることに集中しています。すべての信者は、これから来る迫害を、主に栄光を帰す神の観点をもって受け入れる心構えと力を持たなければなりません。これらの迫害には、苦しみが次第に増していく段階がある一方で、それに伴って栄光／報いも増していく段階があります。

レベル 1 の苦しみ／栄光

財産を奪われること

レベル 2 の苦しみ／栄光

投獄

レベル 3 の苦しみ／栄光

拷問

レベル 4 の苦しみ／栄光

殉教／信仰のために死ぬこと

また聖書から、主は私たちが耐え抜くことのできる以上の苦しみをお与えにはならないことも分かっています。主が私たちに苦しむことをお許しになったのであれば、私たちはその大きな栄誉を喜び、その苦しみの中で主に信頼すべきです。ほかの国々の多くの信者たちはすでにこのようなことを経験しており、これまでのあらゆる時代の仲間の信者たちと同じように、信仰のために死んだ人々もいるでしょう。艱難期、そして特に大艱難期が、それぞれ未信者にとっても信者にとっても、かつてない最悪の時となることを私たちは知っています。

私は、こういう時代に生まれ、それを見るまで生きることを嘆くのではなく、神の観点に立つなら、信者である私たちはこれを、神に栄光を帰すために最大限の報いを得る大きな霊的機会として捉えることができるのだと気づきました！ 確かに、間もなくイエスの口から吐き出されるかもしれない生ぬるい者にとっては、それは骨の折れる、さらには忌まわしいものにさえ思えるでしょう。しかし、燃えるように熱く、理解をもって主に対する真の熱心さを持つ者にとっては、多くの意味で、生きていることが驚くほど素晴らしい時となり得ます。なぜなら、それは私たちが自分の信仰がどれほどのものかを示す時であると同時に、主がご自身の真実さを示してくださる力強い時でもあるからです。そして、主の真実さは、私たちが主に置く信頼をはるかに上回るものとなるでしょう。

私は長い間、それが始まることを待ち望んでいました。しかし今では、それが始まる前に与えられている時間を十分に活用する必要があると分かっています。なぜなら、こうした突然の状況の変化が、あなたのミニストリーや私自身のミニストリーにとって何を意味することになるのか、私たちには分からないからです。突然すべてが「オフライン」になる可能性にも備える必要があるかもしれません。そして、あなたのミニストリーから得てきたものについて「バックアップ」を持っていなければ、それまでに得たものだけが

私たちの手元に残り、その後は、自分が覚えていること、自分の心に刻み込んできたことを用いなければならなくなるでしょう。

私が今経験している非常に厳しい試練から言えば、試されている最中に学ぶことは難しいです。試験会場に教材を持ち込むことはできず、それまでに学び、身につけたことをそこで示さなければならないのと同じように、霊的にも同じです。激しく、重く、容赦のない攻撃を受けている時には、それまでに学んできたことをすべて適用し、慌てず、主に信頼しなければなりません。

私は今、生死にかかわるような厳しい試練を立て続けに経験してきました。そして、霊的に非常に大きな過ちを犯しましたが、そのすべては、恐れや罪悪感のためにみことばから外れ、性急に行動した時に犯したものでした。ですから、戦いの塹壕にいる時には、普段と同じような集中的な学びはできなくても、祈り続け、主を求め続けなければならないのだと気づきました。主は聖霊によって私たちを導き、私たちがみことばから取り入れてきたことを思い起こさせてくださいます。そして、導かれたそれらの箇所を、良いベレヤ人のように読んで確かめることによって、自分たちが正しい方向に進んでいることを知ることができます。

私が最近経験した最大の霊的な欺きは、頭の中で聞こえた静かな声を神からのものだと思ってしまったことでした。これまで信仰の歩みの中で神からの声を聞いたことなど一度もなかったのですから、何をすべきかを告げる静かな声が聞こえた時点で、疑うべきでした。このような声を最後に聞いたのは十代の時で、その時の声は私を反抗へと誘惑するものでした。この「小さな声」は、[列王記上 19 章 11-12 節](#)＜原文では 9 章 11-12 節となっているが、おそらく誤記＞を根拠として示してきました（しかし、サタンが私たちの主を試みたことから分かるように、悪魔は聖書を非常によく知っています）。この声は、天に静けさがあり、艱難期が近づいているため、しるしの賜物が戻ってきたのだと私に告げました。私はこの小さな声が神からのものだと思いましたが、今ではそうではなかったと分かっています。ですから、特に非常に重大な局面で大きな圧力を受け、私たちの武具の最も弱い部分を試されている時には、物事がどれほど巧妙に人を欺き得るのかを実感しています。

ボブ、どうかこれをできるだけ早くあなたのミニストリーの人々と分かち合ってください。今なお塹壕の中で攻撃を受けている者から言わせてもらえば……私は、自分は成熟しているから欺かれることはないと思っていました。しかし、欺かれました。イエスはこう言われました。

「偽キリストや偽預言者たちが現れ、大いなるしるしと不思議を行い、できることなら選ばれた者たちをも惑わそうとするからである。」([マタイ 24 章 24 節](#) /NKJV 訳)

私たちは皆、主との歩みにおいて本当に注意深く、謙遜でなければなりません。欺きは非常に巧妙で、いつも簡単に見抜けるとはかぎりません。私は、あの声が主からのものなのかどうかを確かめるために主に祈ろうとさえ思いませんでした。なぜなら、その声は、神のご計画の中で神が私に何かをしてもらう必要があるのだという考えによって、私の罪深い肉に訴えかけてきたからです。しかしもちろん、神はそのようなものを必要とはしてられません。

「また、『われわれの父にはアブラハムがいる』などと心の中で思ってもみるな。あなたがたに言うておく。神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起こすことができるのだ。」([マタイ 3 章 9 節](#) /NKJV 訳)

ですから、私たちの救いや信仰がいつ失われるか分からないような不安定なものではないとしても、それについて高慢にならないよう注意しなければなりません(残念ながら、私はそうなってしまいました)。そして、私たちは神の御前で子供のような必要があり、神の道は私たちの道よりも高いことを理解し、謙遜になって、神に対する敬虔な恐れを持つ必要があります。私は悔い改めて赦しを求め、今はもっと謙遜に主と共に歩もうとしています。自分の罪深い肉によって、再びこのような重大な過ちを犯したくないからです。本格的な艱難期が始まる前の今、私たちがこのような苦しみを経験していることに、神が示してくださっている憐れみと慈しみを見ることができます。もしかすると、私たちの愛する者たちは、すでに個人的なレベルで艱難を経験しているため、艱難期を免れることになるのかもしれませんが。主は、彼らには後よりも今のほうが救われる機会が多いと見ておられるのかもしれませんが。同じように、主は私が艱難期の最中にこれを経験することのないようにしてくださり、前もって今これを経験させてくださっているのだと、私は主の憐れみと慈しみを見ています。霊的な目で見ると、主は私を「家族」への束縛から解放すると同時に、私が生活を簡素化し、霊的成長を続け、ミニストリーに取り組むことに集中できるよう、障害を取り除いてくださっているのだと思います。ですから、主が御心を行うために与えてくださっている時間と機会を無駄にしたいくありません。

イエスにあるあなたの友より

返信 #12:

確かに私たちは皆、まだ時間があり、まだ光がある今のうちに、できることをしておく必要があります。

「わたしは、昼の間に、わたしを遣わされた方のわざを行わなければならない。だれも働くことのできない夜が来る。」(ヨハネ 9 章 4 節 NKJV)

そこでイエスは彼らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと共にある。暗闇があなたがたを襲うことのないように、光のある間に歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分らない。光のある間に、光を信じなさい。それは、あなたがたが光の子となるためである」。イエスはこれらのことを話されると、立ち去って、彼らから身を隠された。(ヨハネ 12 章 35-36 節 NKJV)

これから先に待ち受けている困難に対するあなたの前向きな姿勢は、まさに私たち皆が身につける必要のあるものです。いったん艱難期が始まれば、主の再臨までの残された期間をはっきりと数えることのできる「短い残り時間のカレンダー」を持つことになるという事実に加えて、未熟な信者たちが艱難期について恐れている、起こると預言されている事柄の大部分は、私たちではなく未信者に向けられるものです。そして、艱難期の後半には厳しい迫害があるとはいえ、「鉢のさばき」は、反キリストに従う者たちが私たちを苦しめ、迫害したことに対して、特に彼らに向けられるものです——そして、そのことを私たちは喜ぶことができます。

私は最近、ケン・バーンズの『The War』をもう一度見ていますが、その中に、日本軍の捕虜となり、労働者として働かさせられるために日本へ移送された一人の兵士が、自分たちの町々を焼夷弾で爆撃するために飛来する航空機の大編隊を見て歓声を上げた、と語る場面があります——自分自身の兵舎まで焼けてしまったにもかかわらずです。私たちが鉢のさばきに対して示す反応も、そのようなものになるのではないかと私は想像しています。恐れおののくのではなく、喜びと安堵をもってそれを迎えるのです——なぜなら、そのさばきは、私たちを虐げてきた者たちに向けられるものだからです。実際、ある意味では、艱難期全体と、主が地上に下されるすべてのさばき(「ラッパ」、「鉢」、そして「雷」)は、すべて私たちの祈りに対する応答なのです。

(1) 小羊が第七の封印を解いた時、天に半時間ほどの静けさがあった。(2) そして私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。(3) また、金の香炉を持った別の御使いが来て、祭壇のそばに立った。そして、御座の前にある金の祭壇の上で、聖徒たちの祈りのためにささげるように、

多くの香が彼に与えられた。(4) そして、香の煙は、聖徒たちの祈りのために、御使いの手から神の御前に立ち上った。(5) それから御使いは香炉を取り、祭壇の火でそれを満たして地に投げつけた。すると、雷鳴のような声と、いなずまと、地震が起こった。(黙示録 8 章 1-5 節)

イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #13:

こんにちは、ボブ。

聖書は、「不法が増す」ことによって、多くの人の愛が冷えると教えています。ですから、背教を引き起こす一因は、神は悪人を決して裁かれたいと考える信者たちがいることなのかもしれません(第二ペテロ 3 章 9 節)。

艱難期のさばきを喜ぶことが神にかなっていることは分かっています。なぜなら、それらはまず、悪人たちが反キリストの側につかないようにするための警告であり、その後は、そうしたことに對する刑罰だからです。また、呪いを求める祈りはもはや用いられるものではなく、[黙示録 6 章 10 節](#)で、自分たちの死に對する復讐を主に求めている者たちは、まさにそのような者たち(艱難期から出てきた殉教者たち)であることも分かっています。ですから、彼らが復讐を求めることは神にかなっていますが、私たちが生きている間にそれを求めることは、そうではありません。

聖書は、私たちが「神の怒りに場所を譲る」べきだと言っています([ローマ 12 章 19 節](#))。ですから、私たちが神による人々へのさばきの妨げになっているような場合もあるのかもしれません。たとえば、人を虐げる者の行為を許容し続け、そこから離れず、その人が自分の行為の結果に直面するに任せないこと、また、自分が蒔いたものを刈り取ることに干渉することは、神の復讐に場所を譲っていないと見なされるかもしれません。神は、汚れたものに触れないこと、またベリアルと交わりを持たないことについて非常にはっきり語っておられます。ですから、ある人が神に對するサタン的な反逆を続けていくつもりであることを示したなら、私たちは「その罪にあずからないために」、その人から距離を置くべきです([黙示録 18 章 4 節](#): ただし、この節は艱難期の実際のバビロンから物理的に離れることについて述べているものですが)。

この苦しみの真ただ中で本当に苦しんでいた時、私はラッパのさばきについて学ぼうとしましたが、それが艱難期の前半の、さらに半ばになって初めて起こること

を知って、正直なところ動揺しました。私は、それらが最初から起こるものだと思っていました。初めはそのことに本当に落胆し、私の信仰も少し揺さぶられました。それらが最初から起こってほしいと思っていたのです。なぜなら、それによって悪人たちが揺さぶられ、その悪い道から離れることを期待していたからです。もちろん、私はこの試練の苦しみが終わってほしいと願っていますから、自分自身のためにそうなることを望んでいたという点で、身勝手に性急だったのだと思います。

しかし、それについて考えてきました……艱難期を通して続く傾向を表す騎手たちがおり、彼らはまさにその最初から活動を始めます。神はここでも、人々が自由意志を用いて、「汚れた者はなお汚れたままに」「義なる者はなお義を行うままに」なることをお許しになっているのだと考えれば、納得がいくように思います([黙示録 22 章 11 節](#))。

神は、この世の人々に、よく考え、最終的にどちらの側につくのかを決めるための時間を与えておられるのです。そしてそれは、神がどれほど愛と憐れみに富み(また怒ることに遅く)、それと同時に義なる方であるかを考えれば、理にかなっています。復讐と正義については主に信頼し、私はそれに一切かかわらない、という考え方を身につけるのがよいと思っています……たとえ時として、自分が受けた不正に対する思いが心の中で燃え上がることがあったとしても、それを、詩篇の作者がそうしているように、主への愛によって乗り越えていくのです。だれ一人として、何をしてもそのまま逃げおおせることはありません。私たちは皆イエス・キリストの御前に立ち、主によって裁かれるか、あるいは評価されることになるからです。すべてを本当に主にお任せするほうがよいというこの理解に、ますます頼るようにしています。

これまでを振り返ってみても、未信者だった時でさえ、私は人に対して実際に仕返しをすることはほとんどありませんでした。たいていは、悪を行い続けようとする人々からただ離れていました。そして、そうすることは私にとって良い結果をもたらしてきました(そのため、私の交友関係は、だんだん狭くなっていきましたが)。ただ、その後で彼らの悪口を言うことはいつもしていたと思います。それは良いことでも、神にかなったことでもありません。____のことで胸がとても痛みますが、主がそれをご覧になっていることを知っています。そして主は、私がこれから経験するどんな苦しみよりも、はるかに大きな苦しみを受けられました。私は主を心から愛しています。永遠に主と共にいられる時が待ちきれません。もう本当にそれほど長くはないのですよね。

私は確かに主に用いられ、ミニストリーにおいて実を結ぶ者になりたいです。日によって楽な時もあれば、そうでない時もあります。私は以前、今では霊的に強くなったとあなたに話しましたし、実際そうなのですが、あの会話によって、自分でもこれほど傷

つくことがあるとは思っていなかったほど深く傷つきました。しかし同時に、言葉の背後にあるものを読み取り、____がどれほど恐れ、混乱しているのかを感じ取るだけの識別力もありました。そして私自身、自分がそのような状態にある時に、だれかに見捨てられるのはとてもつらいと思います。私はこれを乗り越えます。しかし、本当に、本当に苦しいです。サタンは、失意と心の痛みを通して攻撃することが、私を本当に傷つける方法だと知っています。私は昔からとても繊細で感情が豊かで、人を深く愛してきました。ボブ、これほど深い心の痛みを感じることはあるとは思っていませんでした。しかし、私は前進し続けます。

イエスにあるあなたの友より、
どうかこれを分かち合ってください。
追伸：今、____のために祈るべきでしょうか？

返信 #13:

これをありがとうございます——ここには、非常に鋭く核心を突いた考察がいくつもあります。

個人的なことについて言えば、____のことはあなたに「大きな代償を払わせる」ことになるだろうという予感がしていました。あなたが完全に立ち直れるよう祈っています。

『あなたの隣り人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。あなたがたの敵を愛し、あなたがたを呪う者を祝福し、あなたがたを憎む者に善を行い、あなたがたを悪意をもって扱い、迫害する者のために祈りなさい。』(マタイ 5 章 43-44 節 NKJV)

何を、どのくらいの頻度で祈るべきかについては、ある程度の識別が必要です。私自身、このミニストリーから離れていく人たちについては、しばらくの間は祈り続けることにしています。しかし、その人たちが戻ってこないことが明らかになったなら、その後はその人たちを主にお委ねし、たとえば、その救いと霊的成長のために祈ることにしています。

主からのさばきが始まることについてですが、モーセとエリヤはまさに最初に戻って来て、あらゆる種類のさばきを下すことになります。また、艱難期の始まりを告げるしるしと不思議もあります([黙示録 8 章 5 節](#))。そして、艱難期の出来事が進んでいく間を通して、預言が次々と成就していくことになります。最後に、起こるすべてのことの驚く

べき性質そのものが(特に、聖霊による抑制の働きが取り除かれることを考えれば。[リンク参照](#)＜リンク先ファイルの 60 頁-/あるいは A5 版印刷本「来たる艱難期第2部 B: 艱難期の前奏曲」110 頁-を参照下さい＞)、すべての人の注意を引くはずです。要するに、救われることになっている者は皆、主の大いなる憐れみによって救われます——主は、永遠の昔に私たちの祈りをすべて聞いておられたのです。

「また、上では、天に不思議を、下では、地にしるしを示そう。すなわち、血と火と立ちのぼる煙とである。主の大いなる輝かしい日が来る前に、日は暗くなり、月は血に変わるであろう。そして、主の御名を呼び求める者は、だれでも救われるであろう。」([使徒行伝 2 章 19-21 節](#) /NKJV 訳)

友よ、信仰の良い戦いを戦い続けてください！ あなたのミニストリーは必要とされていますし、これらのことが始まれば、なおさら必要とされるようになるでしょう。今のうちに備えられるだけ備えておけば、それだけ、その時によりよく奉仕できる態勢が整っていることになります。

あなたとご家族のことを、毎日祈り続けています。
イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #14:

こんにちは、ボブ。

主は今年、艱難期について二つの重要なことを私に示してくださいました。

1) 私たちはこれからも他の人々に対する光であり続け、その光をかごの下に隠してはなりません。しかし同時に、主がそうであったように、私たちもこの光のゆえに憎まれ、さげすまれることになります。神の御心に従って、なおも柔和さと愛に満ちた親切を保ち続けることは、ますます困難で苦痛なものになるでしょう。[省略]こうしたことについては常識を働かせ、きちんと一線を引き、蛇のように賢くなければなりません。しかし主は、艱難期には、人に親切にしても、その親切が何らかの策略や倒錯したものとして受け取られることなく親切でいることは、ほとんど不可能になるだろうということを私に示してくださいました。もちろん、その倒錯は未信者たちの心の中にあるものです。彼らの行いが悪いからです。しかし、私自身の家族の場合と同じように、私たちの主が悪い者と見なされたように、私たちのほうが悪い者と見なされることになるでしょう。

外に出て人々を見ていると、人々はもはや親切ではなく、冷たいロボットのように振る舞っていることに気づきます。最近の私の経験では、人々にキリストの光を(親切を通して)示すと、彼らは、1) 飢えた人がパンに飛びつくようにそれを求めるか、2) それを故意に悪いものとして曲解して、そのためにあなたを憎む(あるいは、本当の悪へとあなたを引き込もうとする)かのどちらかです。

これから先、神の愛に満ちた親切を示すことは、自分自身に標的を描くようなものです。もちろん、私たちは光を隠したり、塩気を失ったりしてはならないと命じられているのですから、そうしなければなりません。しかし、周囲の人々がますます悪を受け入れるようになるにつれて、私たちは善を行うことによって苦しむようになります……今やそれは避けられないことであり、それが私たちに対する神の御心なのです。

主は、信者たちがそれでもなお神の御心を行い続ける唯一の理由は、主に喜んでいただくことと主の栄光、そして何があろうとも神にかなったことを行うことによって受ける報いに目を向け続けるからだということを、私に示してくださいました。ですから、私たちは主の栄光と自分たちの報いの両方に目を向けていなければなりません。なぜなら、間もなく、善を行い続ける地上的な理由は何一つなくなり、率直に言えば、この世が悪を受け入れている中で善を受け入れ続ける私たちは、世のほとんどの人々から、まず狂った愚か者のように見られ、やがて悪を行う者として見られるようになるからです。

聖書は、悪を善と呼び、善を悪と呼ぶ者には災いが来ると語っています。ここで言われている「災い」は、艱難期に反キリストを礼拝する者たちに降りかかる「災い」のことなのだろうかと思います。また聖書は、私たちを殺す者たちが、自分たちは神に奉仕しているのだと思うようになるとも語っています。ですから、その時点では、彼らは、私たちの主について悪霊につかれていると言ったのと同じように、クリスチャンを本当に悪い者だと思うようになるのでしょう。しもべはその主人にまさるものではないのですから、私たちにも同じことが起こります。私たちの主は、私たちもベルゼブルと呼ばれるようになると警告されました。

厳しいものになりますね、ボブ。私自身の家族は今、実際に起こっていた本当の悪を私が指摘したために、私のほうを悪魔的な者だと思っているようです。私の家族の中では、すでに善を悪と呼び、悪を善と呼んでいます。そして、もう彼らの多くには手が届かないのではないかと考えています。もちろん、今も彼らのために祈っていますが、私の家族は本当に悪を受け入れてしまっており、そのまま艱難期に入っていくことになるのかもしれない。

2) 主はまた、イスラエルについての神の約束をなおも堅く信じ続けるのは、ユダヤ人と真のクリスチャンだけになるということを私に示してくださいました。イスラエルが全世界からどれほど憎まれ、忌み嫌われているかを、私たちは目にしています。陰謀論がますます広まるにつれて、この世のあらゆる悪を「ユダヤ世界秩序」のせいにする人々がますます増えていることも分かります。

何が真実なのか、私には分かりません。自分はユダヤ人だと言いながら実際にはそうではない人々がいるのか、あるいは歴史上、敵の地上での働きに加担する誘惑に負けたユダヤ人たちがいたのか……何が起きているのか私には分かりません。しかし、これらすべてが非常に不透明で霊的に危険なものであり、私たちは完全に距離を置くべきものだということは分かっています。しかし、ユダヤ人を集団的にスケープゴートにする動きは、転がり続ける雪玉のように、日ごとにますます大きくなっています。私たちはイスラエルに対する神の約束を堅く信じ、それが今日もなお有効であることを信頼しなければなりません(置換神学は悪魔的な偽りです)。

ここでもまた、イスラエルに敵対しない唯一の理由は霊的なものとなるでしょう。そうする地上的な理由も利益も何一つなくなるでしょう。ここでもまた、イスラエルに敵対しないために、私たちは憎まれ、さげすまれることになります。そしてここでも、イスラエルを祝福する者を神は祝福し、イスラエルを呪う者を神は呪われるという神の約束に頼り、それを信頼しなければなりません。

親切であり続けることで憎まれるのと同じように、イスラエルを呪わないことで私たちはさげすまれるでしょう。神のみことばにとどまり、主が実際に私たちに望んでおられることを行い続けるなら、私たちは「すべての国民から憎まれる」ことになります。ですから、これから先の暗い日々を切り抜け、そのことによって主に栄光を帰すためには、信仰において堅く立ち、強くあり、神への信頼を保つ必要があります。

私個人にとっては、まるですでに艱難期が始まっているかのようです。しかし、私が今こうした家族に関する恐ろしい苦しみを経験しているのは、主の憐れみと慈しみによるものだとも分かっています。というのも、本当の艱難期の最中に突然これが起こっていたなら、私の信仰がくじけてしまうことを、主はご存じだったのかもしれないからです。私たち一人一人に対する神のご計画において、時というものはすべて重要なのです。

私はモーセと紅海のことを考えていました。モーセは、自分たちがどのように救い出

されるのかは知りませんでしたが、神が必ず救い出してくださると信頼していました。私にも、そのような強い信仰が必要です。この火のような試練からどのように救い出されるのかは分かりませんが、救い出されることは分かっています。

ありがたいことに、今日は霊的に再びしっかりと立つことができ、主の平安も取り戻しました。

何と云えばよいでしょう、ボブ。これは並外れて火のように厳しい試練でした（そして今も続いています）。まだ終わってはいませんが、主が私を切り抜けさせてくださると信頼しています。私はモーセのような信仰を持たなければなりません。

改めて、すべてのことに感謝します。私はあっちへ行ったりこっちへ行ったりしているように見えるけれども、実際にはそうではない、とあなたが言うてくださったことも覚えています。ダビデが詩篇の中でそうしたように、私もこの問題と格闘しながら、一つ一つ乗り越えようとしているのだ、と云っていただきました。

これからは絶えず前進し、私たちの主に栄光を帰すような歩みを続けていきたいと思います。

イエスにあるあなたの友より、

返信 #14:

「これからは絶えず前進し、私たちの主に栄光を帰すような歩みを続けていきたいと思います。」についてですが、あなたは今まさにそうしており、これからも最後までそう続けると、私は強く確信しています。

この世のことで必要以上に心を悩ませることから自分を切り離すことは、もし数か月後に「いよいよ事が始まる」とすれば、身につけておくことが非常に重要な能力となるでしょう。いずれにしても、それができるようになるのは良いことです。また、たとえ普段はその点でかなりうまくできていたとしても、十分に注意していなければ、私たちは皆、弱いところを「突かれて」、間違った反応をしてしまうことがあります。それはモーセにも起こり、エリヤにも起こりました——ヨブにさえ起こりました。ですから私たちは、できるかぎり謙遜に主と共に歩むよう努めるのです([ミカ 6 章 8 節](#))。

私たちの光を輝かせることについて。私の考えでは、それは、世俗的な面（仕事その他）においても、霊的な面（成長し、前進し、実を結ぶこと）においても、日常生活の中で主が私たちに望んでおられることを行っていく時に、自然になされるものです。私はこれを、「さあ外へ出て行って、光を輝かせなさい！」という呼びかけとして捉えること

には強く反対します……それが具体的に何をする事なのかは、はっきりしませんが。私はこれまで、そのようなことを説く、内容の曖昧な説教や福音主義的な檄をあまりにも多く聞いてきました。結局のところ、たいていは人々を「善い行い」へと駆り立てることになります——もっとも、その「善い行い」というのも、その教会にもっと献金するとか、案内係などの奉仕を進んで引き受けるとかで、それ以外に具体的に何を指すのかはよく分かりませんが。しかし、それらが、そもそも私たちが責任をもって行うべき具体的な事柄でもなく、また私たちのミニストリーの一環として御霊に導かれて行う事柄でもないのなら、罪悪感を抱かされることによって、かえって逆効果になりかねない、あるいはそれ以上に悪い結果を招きかねないことをさせられてしまわないよう、よく考えるべきです。あなたがそのような意味で言っているのではないことは分かっていますが、この種のことを人々は間違った意味に受け取りがちだということは、どうか信じてください。

イスラエルを構成する人々について。ある人がユダヤ人なら、その人はユダヤ人です。私たちは歴史や系図について心配する必要はありませんし、そうすべきでもありません。間もなく来る時には、モーセとエリヤ、そして 14 万 4 千人が真のリバイバルを導くことによって、ユダヤ教徒の間に大きな分裂が起こるでしょう。それまでは、異邦人信者である私たちは、ユダヤ人の血を引く信者であればだれであれ、キリストにある私たちの兄弟／姉妹と呼べることを心から喜んでいきます。そして、あなたも示唆しているように、ユダヤ人に対して何らかの否定的な態度や立場を取ることは、主の怒りを招くことになりかねないと私たちは理解しています。政治については、それが国際政治であれ国内政治であれ、いずれにしても私たちがかわからないほうがよい事柄です。私たちは観察し、そこにある傾向を見ますが、それを支配することはできません。しかし、神がすべてを完全に支配しておられることを私たちは知っています。そして、それで私たちには十分なのです。

「もし主イエス・キリストを愛さない者があれば、その者はのろわれよ。われらの主よ、来たりませ。」([第一コリント 16 章 22 節](#) /NKJV 訳)

友よ、信仰の良い戦いを戦い続けてください！

あなたとご家族のため、またあなたのミニストリーのために、毎日祈っています。

イエスにあって、

ボブ・L.

質問 #15:

ボブ

こんにちは！

反キリストについて、いくつか質問があります。

1. もし艱難期がこの秋、2026 年 8 月から 11 月の間に始まるとすれば、それは反キリストもその時に世界の表舞台に登場するということでしょうか？
2. 反キリストはダン族から出ると私は理解していますが——それは、反キリストがユダヤ教を実践するユダヤ人であるということでしょうか。それとも、彼がユダヤ人であることは世間には隠されるのでしょうか？
3. 反キリストは、およそ何歳くらいなのでしょう？
4. 反キリストは結婚しているのでしょうか？ 子供はいるのでしょうか？ それとも独身でしょうか？
5. 彼はヨーロッパ、中東、それともアジアのどこから世界の表舞台に登場するのでしょうか？
6. 艱難期は 2032 年の終わりに終わるとお考えですか？ それとも 2033 年 4 月ごろでしょうか？

ご回答をととても楽しみにしています！

ありがとうございます。

返信 #15:

喜んでお答えします。

1) 分かりません。[第二テサロニケ 2 章 3 節](#)は、大背教が彼の「出現」に先立つことを示していますから、彼が誰なのかを確実に見分けられるようになるまでには、艱難期が始まってからしばらく時間がかかる可能性があります。しかし、艱難期が始まれば、私たちはそれが始まったことを知ることになります。第七の封印が解かれた後（開かれる書が「イエス・キリストの黙示」なので、これが艱難期の始まりとなります）、次のように書かれています。

それから御使いは香炉を取り、祭壇の火でそれを満たして地に投げつけた。すると、さまざまな音と、雷鳴と、いなずまと、地震が起こった。[\(黙示録 8 章 5 節 /NKJV 訳\)](#)

これは全世界的な現象となり、見間違えようのないものとなるでしょう。そして未信者たちは間違いなく、それを何とか別のものとして説明しようとするでしょうが、聖書をよく知っている信者たちには、疑いの余地は残らないでしょう。

2) 分かりません。これに加えて、この国では、たとえ尋ねられても、自分の祖父母より前まで家系をたどることのできる人はほとんどいない、という事実もあります。家系図を文書として持っている人でさえ、たいていそれは完全なものではなく、数百年以上さかのぼるものでもありません。要するに、私たちのうち、自分が「何々である」とか「何々ではない」とかを確実に知ったうえで言える人はほとんどいないということです。確実に知っておられるのは神だけです……そして神は確実にご存じです。

3) 分かりません。狡猾な老人だと考えることもできるでしょうし、非常に若い天才だと考えることもできるでしょう。これについては、実際に現れるのを待つほかありません。獣は自分がキリストであると主張することになり、私たちの主は 30 歳で宣教を始められました。しかし、これはサタンによる企てについての話ですから、それを判断の手がかりとしてそれほど重視することもできないと思います。ほかのあらゆる要素がどうであれ、艱難期の中に彼が現された後には、信者たちは彼が誰なのかを見分けることができると確信しています。

4) 分かりません。私は独身で子供はいないのではないかと思います、それは単に、それ以外のことを示唆するような描写が彼について一度もなされていないからです。ここでも、私たちの主になりすます者という類似性から考えれば、同じ方向を示しているとも言えるでしょう。しかし、やはり聖書は何も述べていないので、それは証拠にはなりません([ダニエル 11 章 37 節](#)については、この箇所はしばしば誤解されています。[リンク参照](#))。

5) 分かりません……しかし、彼はバビロンの支配者となるので、私の推測では、この国(米国)から出てくる可能性が高いでしょう。なぜなら、これを書いている時点では、艱難期に「奥義のバビロン」となる場所の条件に「当てはまる」のは、この国だけだからです(注: 私たちはまだ艱難期に入っていませんから、反キリストがまだ現されていないのと同様に、奥義のバビロンもまだ明らかにされてはいません。[リンク参照](#) <リンク先ファイルの「来たる艱難期 第3部 B:反キリストとその王国」の 86 頁「将来の『謎のバビロン』の将来」/あるいは A5 版印刷本の 86 頁-を参照下さい>)。

6) 艱難期は「ダニエルの第 70 週」([リンク参照](#) <リンク先ファイル/あるいは、A5 版印刷本の「来たる艱難期第一部:艱難期の聖書研究資料」の 23 頁-を参照下さい>)ですから、七年間続きます。したがって、もし 2026 年秋に始まるなら、2033 年秋に終わることになります(秋の祭りは、ハルマゲドン、再臨、そして千年王国を象徴しています。[リンク参照](#) <リンク先ファイルの 65 頁-/あるいは A4 版印刷本「サタンの反乱」の 403 頁「ユダヤの祭儀歴」を参照下さい>)。それは十字架と復活から 2,000 年後とい

うことになります。もし教会時代の終わりとユダヤ時代の最後の七年間との間に重ならないのであれば、すべてがさらに七年先へずれることになります。いずれにせよ、それがこれほど近づいていることを考えれば、前もって霊的に備えるために今できることをしておくことは、確かに私たち皆にとって必要なことです。

地のすべてのへりくだる者よ、主を求めよ。主の命令を行う者たちよ、義を求め、へりくだりを求めよ。そうすれば、主の怒りの日に、あなたがたはかくまわれるかもしれない。(ゼパニヤ 2 章 3 節 /NIV 訳)

「いつも目を覚ましていなさい。そして、これから起ころうとしているすべてのことから逃れ、人の子の前に立つことができるように祈りなさい。」(ルカ 21 章 36 節 /NIV 訳)

「ご回答をととても楽しみにしています！」についてですが、もっとはっきりした答えをお伝えできなくて申し訳ありません！

イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #16:

早速お返事をくださってありがとうございます！！

御使いが地上に火を投げつけることについておっしゃいましたが——その出来事によって艱難期が始まる、ということでしょうか？

言い換えれば、それは何らかの形で火と関係する、地上で実際に起こる物理的な出来事なののでしょうか？

返信 #16:

どういたしまして。

第七の封印が解かれることによって事が始まりますが、その後、半時間の静けさがあります。私はこれを、暦を過越し(十字架と復活)からラッパの祭りと贖罪の日(艱難期とキリストの再臨を象徴するもの)へ移すための、六か月の間隔であると理解しています。[黙示録 8 章 5 節](#)によって「時のカウントが始まる」ことになります。そして、そうです、火を投げ落とす行為は実際のものですが、同時に超自然的で目には見えないものです。その火はさばきを象徴していますが、それによって、耳に聞こえ、目に見え、

実際に体で感じられる「声と、雷鳴と、いなずまと、地震」が引き起こされます。

イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #17:

ロバート

では、第七の封印は、地上のある一か所で起こる物理的な出来事で、音や地震や火を伴うのでしょうか？ そして、それは全世界の注目を集めるほど激しいものなのでしょうか？ また、その後に六か月の静かな期間があるのでしょうか？

反キリストが現れるのは、その六か月が終わった後だとお考えですか？ それとも、その六か月の間に現れる可能性もあるのでしょうか？

返信 #17:

第七の封印……そしてすべての封印が解かれること……は、天においてのみ起こる出来事です([リンク参照](#): 来たる艱難期第二部 B 「七つの封印」<リンク先ファイルの 66 頁-/あるいは A5 版印刷本の 122 頁-を参照下さい>)。

[黙示録 8 章 5 節](#)で、御使いが祭壇から火を取り、それを地に投げつけることによって、全世界で経験される、目に見え、耳に聞こえ、実際に体で感じられる現象が引き起こされます。

この二つの出来事の間には、確かに「半時間ほど」の天の静けさがあります。私はこれを(十分な理由に基づいて)、艱難期が 2026 年であれ 2033 年であれ、あるいは実際にいつ始まるのであれ、その開始時期を春から秋へ移す六か月の猶予期間を意味するものと解釈しています([リンク 1](#) および [リンク 2](#) 参照)。

反キリストとその「登場」については、反キリストが現れる過程を三つの段階に分けることができます。1) 彼はすでに生きていて、何か重要なことを行っているものの、まだその正体は何者なのか知られておらず(また、広く疑われてもいない)段階——これは現在すでにそうである可能性があります。2) 彼が間違いなく獣であると「明らかにされる」段階——[第二テサロニケ 2 章 3 節](#)は、これが艱難期に入り、大背教が起こった後であることを示唆しています([リンク参照](#))。艱難期の初日から前半のかなり遅い時期までのどこであっても可能ですが、私の推測では、この問題について学んできた信者たちに

は、かなり早い段階で彼が誰なのか明らかになるでしょう。3) 艱難期の中間点と大迫害の開始([リンク参照](#)＜リンク先ファイルの 73 頁-/あるいは A5 版印刷本「来たる艱難期第4部: 大艱難期」の 155 頁「VII. 大迫害」を参照下さい＞)——大艱難期が「大いなる」ものとなるのは、反キリストによる信者への迫害のためです。そして、全世界の人々に自分の「刻印」を受け入れさせようとする彼の企てによって、「六百六十六」という、正体を見分けるための決定的な基準が生じます。そのため、弱く、無知で、心の定まらない信者でさえ、彼が何者なのかについて全く疑う余地がなくなります——したがって、彼らには言い訳の余地がなくなるのです([リンク参照](#): 来たる艱難期第 4 部「[VI. 獣の預言者と世界的な反キリスト教](#)」＜リンク先ファイルの 44 頁-/あるいは A5 版印刷本の 91 頁-を参照下さい＞)。

イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #18:

ロバート
こんにちは。

では、地上で大きな物理的出来事が起こり、その後に六か月の静かな期間があるということですね。反キリストは、その大きな出来事の後ならいつでも現れる可能性がある。そしてその後、およそ三年半の間、彼はあらゆる問題への答えを持ち、すべての人に一致を呼びかける「人類愛と友愛の人」のような存在になるのでしょうか？

一つの世界宗教を率いるのは、その時のカトリック教皇、つまり偽預言者であり、彼が、人類が反キリストを、愛と抱擁と人類の一致を説く人物として全面的に受け入れるよう助けるのでしょうか？！

命を与えられる獣とは、AI によって動かされる像で、それが独自の意識を持つに至ったと人々に説明される可能性はあるのでしょうか？！そして、この獣が、すべての人のデジタル ID とデジタル通貨を掌握しているため、売り買いをしたり、生活したり、働いたり、食べ物を買ったりするためには、すべての人が「刻印」を受けなければならないよう強制するのでしょうか？ また、「刻印」を拒むクリスチャンたちは、この AI の獣のようなものによって、金銭、仕事、病院、社会から締め出され、その結果「殺される」ことになるのでしょうか？！

ちょっと考えてみたことです。

返信 #18:

[黙示録 8 章 5 節](#)に記されている「大きな物理的出来事」は、第七の封印が開かれてから六か月後に起こります。第七の封印が開かれることによって、艱難期が始まるまでの六か月の間隔が生じるのです。

(1) 小羊が第七の封印を開いた時、天に半時ほどの静けさがあつた(すなわち、六か月の間隔)。(2) そして私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。(3) また、金の香炉を持った別の御使いが来て、祭壇のそばに立った。そして、御座の前にある金の祭壇の上で、聖徒たちの祈りのためにささげるように、多くの香が彼に与えられた。(4) そして、香の煙は、聖徒たちの祈りのために、御使いの手から神の御前に立ち上った。(5) それから御使いは香炉を取り、祭壇の火でそれを満たして地に投げつけた。すると、雷鳴のような声と、いなずまと、地震が起こった(すなわち、見間違えようがなく、全世界で経験されるもの)。(黙示録 8 章 1-5 節)

反キリストが「現れる」ことについては、それが何を意味するかによります。前回申し上げたように、彼はおそらく今すでに「どこかにいる」でしょう。現在でも、全く人目につかない存在というわけではない可能性がありますし、艱難期が始まった後には、これらのことを学んできた信者たちに彼が誰なのか分かるようになる可能性はさらに高くなります。彼が「現される」と言われているのは、正しく教えられてきた信者たちにとって彼の正体が明白になるという意味だと私は理解していますが、それは艱難期が始まってからしばらく後のことです。そして、獣の刻印が導入され、聖書が私たちに与えている判別のための決定的な基準が現れた時には、その正体について絶対的な確信を持つようになります。

「あらゆる問題への答えを持ち、すべての人に一致を呼びかける『人類愛と友愛の人』」について。私はそのような言い方をしたことはありません(「[来たる艱難期第 3 部 B: 反キリストとその王国](#)」を参照してください)。「愛の人」という表現は、聖書が「不法の者」について語っていることとは明らかに相容れません(前掲リンク参照)。反キリストについての描写のほとんどは、皮肉として見たとしても、好意的なものとはほど遠いものです。リンク先の研究では、聖書が示唆しているところに基づいて、彼がどのようにして支持者を獲得するかを説明しようとしています。一例を挙げれば、多くの宗教について考える時、「人類愛、友愛、一致、愛」という言葉が真っ先に私の頭に浮かぶわけではありません。しかし、改宗者の数とその献身の度合いを成功の尺度とするなら、多く

の宗教は成功を収めてきました。獣も同じような献身を自分の追従者たちのうちに引き起こすと考えられますが、それは必ずしも、私たちが「肯定的」と考えるような理由によるものではないでしょう。そのような要素も含まれている可能性はあります。また、彼が最も熱烈な支持者たちに報いる者となることも、私たちは知っています(前掲リンク参照)。

「カトリック教皇」についてですが、その時にその地位に就いている人物が誰であれ、その人物が偽預言者である可能性は非常に低いと私は考えています。反キリストの宗教(リンク参照: 来たる艱難期第4部「[VI. 獣の預言者と世界的な反キリスト教](#)」<リンク先ファイルの44頁-/あるいはA5版印刷本の91頁-を参照下さい>)は、カトリックだけではなく、世界のあらゆる宗教を包含するものとなります。ですから、伝統的なプロテスタントはしばしば偽預言者の役割を教皇と結びつけてきましたが、私にはその可能性は低いように思われます。反キリストがエルサレムに新たに再建された神殿に座し、偽預言者が反キリストの姿をかたどった、ものを言う像を立てる時、その時点では私たちに何の疑いもなくなるでしょう。

AI やあらゆるデジタル技術、特に経済におけるそれらの役割については、私は非常に多くの質問を受けてきました(「[終末論シリーズ](#)」のメール Q&A 参照)。もちろん、獣が世界を支配するようになる時には、どのような技術が利用可能であれ、それを用いて自分の父である悪魔の計画を推し進めるでしょう。しかし、それは「弓矢」の時代でも同じことでした。技術は目的を達成するための手段にすぎません。それが悪となるのは、その意図が悪い場合だけです。現在の技術の発展は、テクノロジーを悪のために利用する能力が以前より大きくなっていることを示しているのでしょうか？ もちろん、そうだと思います。しかし、用いられる手段よりも、それを操っている者に目を向けるほうがよいでしょう……そして、天と地を造られた方が、これまでも、そしてこれから、すべてのことを絶対的に支配しておられることを覚えておくことです。特に、主に信頼を置いている私たちの場合には、すべてが私たちの益となるように支配されているのです。

神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちのためには、すべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っている。神はあらかじめ知っておられた者たちを、御子のかたちに似た者とするために、あらかじめ定めてくださった。それは、御子が多くの兄弟姉妹の中で長子となられるためである。そして、あらかじめ定めた者たちをさらに召し、召した者たちをさらに義とし、義とした者たちをさらに栄光ある者としてくださった。(ローマ 8 章 28-30 節 /NIV 訳)

イエスにあって、

ボブ・L.

質問 #19:

ボブ

改めて、ご説明をありがとうございます！

では、たとえば艱難期が 2026 年 9 月に始まるとすると、その大きな出来事は(おおよそ)いつ起こるのでしょうか。

私は、その六か月の間隔は今まさに進行しているものだと思っていました(1 月から 6 月、あるいは 2 月／3 月から 8 月)。そして、それが、艱難期の始まりは 2026 年のもっと早い時期ではなく、今年の「秋」になると先生が考えておられる理由なのだと思っていました。

もしそうであれば、その大きな出来事は、おそらく 2026 年 9 月／10 月／11 月に起こることでしょうか？

反キリストについてですが——私は、彼は七年間にわたって活動するものだと思っていました。最初の三年半は「人類を統一させる人物」として振る舞い、その後の三年半で本性を現す——その時に獣の刻印などを推し進める(2030 年から 2033 年)。そして主が彼を滅ぼされ(2033 年)——キリストの統治と、聖霊の新しい仕方での働きが始まる(2033 年以降——？)。

ですから、先生の著作に基づく私の考えはこうです。反キリストは 2026 年秋に現れ、ほかの世界の指導者たちと共に、あの大きな出来事やその他の出来事(2026 年から 2029 年)を背景として、人類に友愛のうちに一致するよう呼びかける。その間、彼と世界の指導者たちは、すべての人をデジタル ID とデジタル通貨へと移行させるよう推し進め、その期間中にさまざまな問題点も解決していく(2027 年から 2029 年)。その後、2029 年ごろ(2029 年 7 月から 12 月)に獣に命が与えられ？ 反キリストが獣と偽預言者と共に、2030 年から 2033 年まで獣の刻印を推し進め、2033 年に私たちの主がすべてに決着をつけられる(艱難期が終わる)。

これらの考えについて先生がどうお考えになるのか、回答を心待ちにしています。ありがとうございます！

返信 #19:

[黙示録 8 章 5 節](#)の出来事が、艱難期が始まったことを告げる「合図」となります。で

すから、それは問題となる年の秋に起こることになります。年代について言えば、それは、太陰暦に基づいて計算したユダヤの祭儀暦の第一の月の半ばから六か月後ということになるように思われます(必ずしも現在用いられている世界創造紀元[Anno Mundi]の暦によるものではありません)。したがって、紀元 33 年の私たちの主の復活から二千年と六か月後となれば、この秋の 10 月第 1 週か第 2 週あたりになるでしょう(9 月の可能性もあります)。もし教会時代とユダヤ時代との重なりがないのであれば、それより七年後(すなわち 2033 年)ということになります。

「彼は七年間にわたって活動するものだと思っていました」について。前回のメールで説明したように、「活動する」ということで何を意味しているかによります。彼が世界を支配すると預言されているのは、最後の三年半、すなわち大艱難期です。もちろん、彼が突然どこからともなく現れるわけではありませんし、聖書は彼が支配権を握るまでの過程について多くのことを語っています(リンクの[「来たる艱難期第 3 部 B」](#)参照)。

「[反キリストが]ほかの世界の指導者たちと共に、人類に友愛のうちに一致するよう呼びかける」について。これまで多くの投稿で述べてきたように、聖書は艱難期について、出来事の全体的な時系列という点では非常に多くの情報を与えています。しかし、聖書が私たちに示していないのは、その時の物事が実際にどのような様相を呈するのかという、その具体的な「様子」です。聖書は、反キリストがどのようにして支持者を獲得するかについて多少は語っていますが、あなたが述べているような形で私が具体的に描写できるほど詳しくは語っていません。それについては、実際に起こるのを待つ見るほかありません。

「その間、彼と世界の指導者たちは、すべての人をデジタル ID とデジタル通貨へと移行させるよう推し進め、その期間中にさまざまな問題点も解決していく」について。ここについては、私はそのような考えからはっきりと距離を置きたいと思います。この二つが何らかの役割を果たすのかどうかさえ、私には分かりません——もともと、これらと艱難期との関連について長年にわたって多くの憶測がなされてきたことは承知しています。獣の刻印は、獣に従う未信者たちが自らの意思で受け入れる、実際に身体につけられる入れ墨です。それがそのようなデジタル技術と何らかの関係を持つのかどうか、私には分かりませんが、私はそうではないのではないかと考えています。獣の方針が、刻印を持たない者には「売り買い」をさせないというものになることは告げられていますが、獣が滅ぼされる前に、この方針を全世界で完全に実施できるようになるとは書かれていません。私は、おそらく完全には実施できないだろうと考えています。なぜなら、もし完全に実施されれば、それはおそらくすべての信者の死を意味することになるからです——しかし、私たちの主の再臨の時まで多くの信者が生き残り、復活することを私

私たちは知っています([第一コリント 15 章 51-58 節](#): [第一テサロニケ 4 章 14-17 節](#))。悪しき者のあらゆる計画の場合と同じように、最後に成し遂げられるのは主の御心なのです。

「もしその日々が短くされなかったなら、だれ一人として生き残ることはできないであろう。しかし、選ばれた者たちのために、その日々は短くされる。」([マタイ 24 章 22 節](#) /NIV 訳)

イエスにあって、
ボブ・L.

質問 #20:

ありがとうございます！！

では、七年間の艱難期の「正式な」始まりは、2026 年 10 月初めになる可能性があるということですね？？ そうですね？

(念のためお伝えしておきますが、これらすべて——私の質問と先生の回答——は、私たちの間だけにとどめています。というのも、この時系列について先生が述べておられるのは、その可能性／蓋然性についての先生の見解であって、この見解が絶対に正しいとおっしゃっているわけではないことを理解しているからです。)

返信 #20:

その通りです。この解釈が正しいことが分かれば、ということですが(あるいは 9 月かもしれません)。私は、この日付がいくつもの仮定に基づく解釈であるという事実を、これまで一度も隠したことはありません。それらの仮定は聖書から導き出され、注意深く検討されたものではありませんが、それでもやはり、聖書が直接教えていることではなく、仮定です。このことについての詳しい説明は、リンク先でご覧いただけます。

「私たちの間だけにとどめている」ということについてですが、私はあなたがこれをほかの人と分かち合ってもまったく構いません。私はいつも、さまざまな人たちとこうした事柄について話し合っていますし、そのようなやり取りの多くは、リンク先にある毎週掲載の「[終末論に関する諸問題](#)」シリーズでもご覧いただけます。

イエスにあって、

質問 #21:

ありがとうございます。ほかの人と分かち合うことについても。

では、もし先生の解釈が正しければ、2026 年 10 月はいよいよ始まりの時ということですね！

あと二つ質問があります。

——反キリストは中東の国から現れるのでしょうか？ それとも、世界のどこからでも表舞台に登場する可能性はあるものの、明らかに中東系の血筋の人物なのでしょうか？

——艱難期が今年 2026 年 10 月に始まる可能性が非常に高いという結論に至られたわけですが、9 月／10 月／11 月／12 月に、それを告げるような大きな出来事が起こる可能性があるとお考えですか？

返信 #21:

1) 獣は中東ではなく、神秘のバビロンから現れます([リンク](#)参照<リンク先ファイルの 37 頁-/あるいは A5 版印刷本「来たる艱難期第3部 B:反キリストとその王国」の 86 頁を参照下さい>)。しかし、特にヨーロッパにおいて反キリストが政治的支持を得る大きな理由の一つは、彼が新たに統一された中東世界に対抗することになるからです。そして、その中東連合の支配者は、実際の獣とその追隨者たちによって、間違いなく「反キリスト」と見なされることになるでしょう。私は、この二者の対立こそが、西側の多くの人々の目をくらませ、本当の反キリストが誰なのかを見えなくさせる大きな要因になるのではないかと強く考えています(すなわち、獣はもう一方の支配者を「反キリスト」と呼び、彼とその同盟に対する「十字軍」を率いることになるでしょう)。

2) [黙示録 8 章 5 節](#)に記されているしるしを別にすれば、聖書はそのような一つの特定の出来事について何も示していません。出来事が全体としてどのように進んでいくかについての大きな流れは示されていますし、もちろん、最初の三年半の後半になれば、七つのラッパのさばきを見過ごすことはまずできないでしょう。しかし、それ以外については、全世界に及ぶ地震、雷鳴、いनाずま、そして声が起こらないかぎり、艱難期はまだ始まっていないと考えて差し支えありません。ひとたび艱難期が始まれば、すべての信者はますます私たちの主に近づき、安全と救いを主に仰ぎ求めるべきです(もちろん、いずれにせよ、これは私たちが常に行っているべきことです)。

ヤコブの神よ、あなたの叱責によって、戦車も馬も深い眠りに陥った。あなたこそ、恐るべき方である。あなたがひとたび怒られる時、だれが御前に立つことができるか。あなたは天からさばきを聞かせられた。神がさばきのために立ち上がり、地のすべての柔和な者を救われた時、地は恐れて静まった。セラ。まことに、人の怒りさえもあなたをほめたたえ、残りの怒りをあなたは抑えられる。あなたがたの神、主に誓いを立て、それを果たせ。その周りにいるすべての者は、恐るべき方に贈り物を携えて来よ。主は君主たちの霊を断ち切り、地の王たちにとって恐るべき方である。(詩篇 76 篇 6-12 節 /KJV 訳)

主は王である。地は喜び、遠い島々も喜び。雲と暗闇が主を取り囲み、義と公正がその御座の基である。火は主の御前を進み、その敵を四方から焼き尽くす。そのいなずまは世界を照らし、地はそれを見て震える。山々は主の御前に、全地の主の御前に、ろうのように溶ける。天はその義を告げ、すべての民はその栄光を見る。偶像を拝む者、偶像を誇る者はみな恥を受ける。すべての神々よ、主を拝め。シオンはこれを聞いて喜び、ユダの村々も、主よ、あなたのさばきのゆえに喜び。主よ、あなたは全地の上におられるいと高き方、すべての神々にはるかにまさって高く上げられている。主を愛する者よ、悪を憎め。主はご自分に忠実な者たちの命を守り、悪しき者の手から彼らを救い出される。光は正しい者の上に輝き、喜びは心の直ぐな者の上に輝く。正しい者たちよ、主にあって喜び、その聖なる御名をほめたたえよ。(詩篇 97 篇 1-12 節 /NIV 訳)

イエスにあって、
ボブ・L.